

百舌鳥・古市の旅 2021



2021年4月

旅のチカラ研究所 植木圭二

関西を起点にした小旅行として大阪の「百舌鳥・古市古墳群」に日帰りの気ままな一人旅で行ってきた。その経緯も含めて紹介したい。

■なぜ世界遺産

2019年に「百舌鳥・古市古墳群」が世界文化遺産に登録された。世界遺産検定2級の私として、この登録は難しいのではないかと思っていた。

その理由はというと、天皇陵として不確かな部分が多く果たしてユネスコはそれを認めるのかということで、例えば仁徳天皇陵は本当に仁徳天皇の墓なのかというのが証明されていない。それゆえ最近では仁徳天皇陵とは言わずにその所在地から大仙古墳と言われている。さらに仁徳天皇についても実在したのかという疑問視する声もあり、実在したとすれば4～5世紀だが、日本書紀では110歳、古事記では83歳まで存命したとされている。

日本の古代史は謎の部分が多いが、基本的には天皇家が主役になっている。従ってそれを解明するために学者たちは天皇陵の学術調査を望んでいるが、これに対して管理する宮内庁は調査を認めない。それは祖先が眠る神聖な墓だからという理由らしいが、うがった見方をすると天皇家の歴史やルーツが明らかになることを懸念しているという声もある。

世界遺産への登録は、まず日本国内では文化遺産については文化庁が、自然遺産については環境省がとりまとめ日本政府としてユネスコに申請する。ユネスコはICOMOS（イコモス：国際記念物遺跡会議）に依頼し世界遺産にふさわしいかを調査し、その結果登録が決まる。登録されなかった事例は「武家の古都・鎌倉」や自然遺産としての「富士山」がある。

百舌鳥・古市古墳群はどうやってこの調査に対応して“ふさわしい”と認めてもらったのか、私には大変興味があることだ。

■百舌鳥・古市古墳群とは

そもそも百舌鳥・古市古墳群とは、どんなものなかを調べてみた。

大阪府堺市の百舌鳥地区と、藤井寺市と羽曳野市の古市地区にあって、この2つの地区を合わせて49基の古墳がユネスコの世界文化遺産に2019年に登録された。

百舌鳥地区にある仁徳天皇陵は三重の濠を含めた長さは840m、墳丘のみでも486mという日本で1番大きい前方後円墳で、エジプトのクフ王のピラミッド、中国の秦の始皇帝陵と並ぶ世界3大墳墓の一つといわれている。上空から見ると円と四角を合体させた前方後円墳という日本独自の形で、5世紀中ごろに約20年をかけて築造されたと推定される。

古市地区には日本で2番目に大きい応神天皇陵がある。こちらも前方後円墳で、墳丘の長さは425mということで仁徳天皇陵に比べてやや小さいが、墳丘の高さがこちらの方が高いので体積としては日本で1番になっている。

また単に大きさだけでなくこの2つの地区には円墳、方墳、前方後円墳、帆立貝形墳という日本各地で見られる代表的な4つの古墳がある。帆立貝形墳というのはあまり聞いたことがない古墳は、帆立貝を上から見たような形なので、前方後円墳の原型か変形というものになる。

■現地に行って

いろいろ書いたが、私は現地に行ったことがない。つまり仁徳天皇陵（大仙古墳）も応神天皇陵（誉田御廟山古墳：こんだごびょうやまこふん）も本物を見たことがない。やはり実際に現地で見ないととは分からないことが多い。ちょうど京都に住む娘のところに用事があって車で来ていたので、日帰りで現地に一人で行くことにした。

関西に住む友人から「仁徳天皇陵を見るなら堺市役所がいいよ」と助言をもらっており、まず私は堺市役所の21階にある展望ロビーにやって来た。

仁徳天皇陵は堺市役所から直線で約1km先にあるが、ここからでは小さな森にしか見えな。それは大きな巨体を横たえるように眠る鯨のようにも見える。



【堺市役所展望ロビーから見た仁徳天皇陵 手前は市役所のヘリポート】

残念ながら見えた小山は前方後円墳だと識別するのも難しく、ガラス越しなので本物感が湧かない。せっかくここまで来たならば、やはり近くに行くしかない。

そこにいたボランティアガイドのおじさんと話をすると「仁徳さんの近くの大仙公園の駐車場に停めると安くて便利だよ」と親切に教えてくれる。いかにも大阪人らしく“仁徳さん”と呼ぶのと、100円でも安い駐車場を教えてくれるのが嬉しい。ついでに「毎月オープンした百舌鳥古墳群ビジターセンターの紹介ビデオがいいよ」と教えてもらう。

早速ビジターセンターに行って紹介ビデオを見ると、自信をもって教えてくれただけのことがあり実に良くできている。単に前面のスクリーンに映すだけでなく、足元にまで投影する立体的な映像で迫力ある音楽も加わって現代風のアレンジをしている。ただ内容はこの地域の歴史などを紹介するのにとどまっており、仁徳天皇やその陵墓の謎には触れていない。

ビジターセンターの直ぐ隣にある仁徳天皇陵に行ってみる。立派な拝礼所があって三重の濠の外側に鳥居があって、その鳥居の手間に柵があるので鳥居をくぐることも出来ずに、濠の外から鳥居越しに陵墓らしき森を拝むだけになっている。



【仁徳天皇陵の拝礼所】

陵墓を一周しようと歩き始めるが、濠の外側には背の高い鉄製の柵が延々と張り巡らされている。濠の周りだけを歩いて一周することはできず、住宅地の中を通り抜ける部分も含めて陵墓周辺を一周する3km弱の道路が整備されている。ウォーキングやジョギングを楽しんでいる住民とすれ違いながら私も一周をする。歩きながら見える景色は、柵越しの濠とその向こう岸にある墳丘で、少し濁ったどんよりとした池と木々が茂った山にしか見えない。

所どころ陪家（ばいちょう）と呼ばれる小型の古墳がある。埋葬者の近親者のものだという。そういえばエジプトの大ピラミッドにもすぐ近くに王妃の小さなピラミッドがあったことを思い出した。

歩きついでに仁徳天皇陵の周辺にある反正天皇陵、方違神社、そして履中天皇陵にも立ち寄り、結局は約 10km 歩く。アルチュウ（歩き中毒）を自認する私にとっては何ということない距離だが、普通の人にとっては結構な運動になるだろう。

最後に大仙公園の中を抜けて戻ってくるが、この公園は驚くほどに広い。仁徳天皇陵と同じくらいの広さでたくさんの人々が散歩や花見を楽しんでいる。なだらかな丘になっており、陪家らしき小さな古墳が周囲にあるので、ひょっとしたらこの公園も陵墓だったかもしれない。だとしたら後世の人々に日々愛されているその姿に、私はなぜか嬉しく思えてくるから不思議だ。

古市地区まで約 30 分、車を走らせて応神天皇陵にやって来る。

応神天皇は仁徳天皇の父親で、実在したならば 111 歳か 130 歳だったというから何と長寿の血筋なのだろうか。

こちらにも拝礼所があって鳥居越しに陵墓を見ることができるが、周囲は完全に住宅密集地なので陵墓の外周に沿って一周するのも困難になっている。それでも何とか遠回りをしながら一周をすると、濠を目の前にして住宅が横並びに何軒も建っている光景を目にする。まるで世界遺産の天皇陵の濠を自分の家の庭の池のようにしている。そんな威厳ある借景を見て日々の生活をおくっていることになる。



【応神天皇陵の濠に面して建つ民家 右の木々が生い茂る部分が墳丘】

結局、本日見て回った天皇陵は住民の生活環境の一部になっているが、入ることも許されない池のような濠と荒れた小山のような墳丘が、ただそこにあるだけという風景を演出している。それは何となくもったいないという気持ちになるのは私だけではないだろう。

■何故、世界遺産になったのか

世界遺産の登録には 10 の登録基準があり、一つでも該当すれば世界遺産に登録される。世界遺産検定の公式テキストに記載されている百舌鳥・古市古墳群の登録理由は基準 3「文明の証拠」、基準 4「建築・科学技術」が該当すると書かれている。以下、その記述である。

登録基準 3：文明の証拠

墳墓の規模と形によって当時の政治・社会構造表現しており、古墳時代の文化を物語っている。

古墳時代において社会階層の違いを示す高度に体系化された葬送文化が存在し、古墳の建設が社会秩序を表現していた。この地は日本列島の各地で築かれた古墳群が形作る階層構造の頂点にあり、最も充実した典型的な階層構造は他の古墳群に見本になった。

登録基準 4：建築・科学技術

日本列島独自の墳墓形式である古墳の顕著な事例であり、集団や社会の力を誇示するモニュメントとして先祖の墓を築き社会階層を形成した、日本独自の歴史段階を示している。

この地に密集して築かれた古墳は、世界各地の墳墓に見られるような埋葬施設の上に盛土や積石をただけの単純な墳墓ではなく、葬送儀礼の舞台としてデザインされている。埴輪と葺石で装飾され、濠が張り巡らされ、幾何学的な段築を持つなど、他に類例のない建築的到達点である。

これを読むと、古墳の大きさや形が当時の階層社会を形成したことを理由にあげている。

当然内部の調査はしていない。従って埋葬人物の特定や調査については別途課題とは指摘している。

構成資産として登録された 49 基の古墳のうち、全てが宮内庁管轄ではなく公開されている古墳もあるので、当時の社会という概念を当てはめたのだろう。

それにしてもこの世界遺産申請は宮内庁と文化庁のせめぎ合いや妥協によるものようだ。よく見ると仁徳天皇陵は申請では「仁徳天皇陵古墳」と表現している。埋葬者が特定されている墓を陵と呼び、埋葬者が特定されない墓を古墳と呼ぶが、この書き方では「仁徳天皇が埋葬されているはずだが、特定できない墓」という意味になる。

実に上手く申請したというのが正直な私の感想である。

■世界遺産の申請

今回の「百舌鳥・古市古墳群」の世界遺産登録で私はある出来事を思い出した。

2013 年「武家の古都・鎌倉」はイコモスから“落選”を言われた。それは日本の世界遺産候補としては珍しい。

年間 1900 万人の観光客が訪れる鎌倉は、豊かな自然、格式ある伝統的な建造物、現代の建物との調和、街の景観と、私は世界遺産にふさわしいと思っている。

しかしその鎌倉が落選した。武家文化を反映した寺や神社、切通、漁港などは現存しており当時の文化の存在は証明できるが、武家政権そのものの証拠が無いというのが落選の理由だ。それは権力の所在地たる領主の館や市庁舎のようなものがないために武家の古都としての物的証拠が不十分だとした。

源頼朝の政権で初めて建てたとされるのが「大蔵御所」と呼ばれる建物であり、それが権力の所在地を示すものだが、その発掘調査にまでは至っていなかった。

私は、これは作戦ミスだと思う。

「武家の古都」としたのが、まずかった。武家が初めて作った幕府の本拠地というのをテーマにしたかったのだろうが、単に「古都鎌倉」として武家政権は控え目にした方が良かったかもしれない。他の日本の世界遺産では「古都京都の文化財」、「古都奈良の文化財」、「日光の社寺」などのようにして権力者にスポットを当てていない。

「百舌鳥・古市古墳群」もその大きさから“大和朝廷の威厳”を示すような内容で申請をすれば、誰が眠っているのか分からない墓では登録されるとは思えない。

ついでに面白い事例を紹介する。2018年に世界遺産登録された「長崎と天草の潜伏キリシタン関連遺産」は世界遺産に申請するにあたり、途中からイコモスとアドバイザー契約を結んだ。

するとイコモスは聞きなれない“潜伏キリシタン”という言葉を用いた。禁教令が解かれてカトリック教会に戻った信者たちを潜伏キリシタンと呼び、そのままの信仰スタイルを変えずにカトリック教会に戻らない信者を隠れキリシタンと呼び、区別した。そして潜伏キリシタンの施設だけが選ばれ世界遺産登録された。それはおそらく外圧によって独自に進化した宗派というのは世界中に多くあるが、外圧が無くなった時に元に戻るという点を評価したのだろう。(詳しくは旅行記「五島列島の旅 2020」参照)

「百舌鳥・古市古墳群」は日本が世界遺産の申請手法に手慣れてきたことを証明しているのかもしれない。

■旅の記録

実施は2021年3月29日(月)、その行程を以下に示す。

- ・10時 堺市役所着、展望室で見学
- ・11時 百舌鳥古墳群ビジターセンター、そして仁徳天皇陵、反正天皇陵、大仙公園、方違神社、履中天皇陵訪問
- ・15時 古市に移動し、応神天皇陵訪問

京都出発、大阪帰着なのでガソリン代、高速道路、駐車場などで約2000円になった。